第６師団の隊員諸官へ

３月１１日１４時４６分に発災した、未曾有の東日本大震災から、間もなく１ケ月が過ぎようとしている。

師団は、発災当初から受持ち隊区の太平洋沿岸地域において初動対応しつつ、僚友である師団・旅団等が増援部隊として全国から駆けつけてくれた以降、逐次に地域を申し送り、現在は宮城県石巻市から仙台市に至る沿岸部にほぼ全力で展開し、行方不明者の捜索及び被災者への民生支援活動に全力を尽くす毎日である。また第６特殊武器防護隊はＣＲＦとともに福島の原子力発電所に対応しており、第６師団とともに同一地域で活動している関係各部隊、航空自衛隊及び共同する米軍においても同様に活躍中である。

この間、我々は１名の尊い命を失うとともに、親族が被災した隊員も数多い中で『郷土部隊』として、寝食を忘れて被災者の立場を最優先し、被災者の目線に立って活動してきた。その姿は、全国の国民の知るところであり、師団長の誇りである。

また、被災された方々から掛けていただく言葉が、逆に我々を勇気づけ、士気を高める根源になっているのは、被災者と直に接している隊員一人ひとりが最も強く感じていることであろう。

私は、諸官がこれまでの教育訓練で培ってきた体力・気力を振り絞って活動している事を十分に承知しつつ、敢えて、任務完遂まで更に奮起するよう督励するものである。

我々が保持すべき共通認識は『郷土とともに』との思いであり、『郷土部隊としての矜持』である。そこに求められるのは、被災者に対しては勿論だが、全国から応援に駆けつけてくれた僚友に対して、また部隊の同僚に対する思いやりであり隠忍であると痛感している。我慢しにくいところを、じっと我慢し更に辛抱して事に当たる、それこそが、我が郷土を守る第６師団の隊員の真骨頂であるはずである。

しかるべき時期には、現在他の師団等が活動している師団隊区全ての地域において、再び第６師団が活動することになるだろう。そして、必ずや任務を完遂して、それぞれの駐屯地に帰隊し、郷土の住民とともに任務完遂の喜びと充実感をそっと分かち合いたいものである。

第一線で活動している時も、戦力回復を命ぜられて休養している時にあっても、どうかこの思いを肝に銘じて行動してもらいたい。御家族、御親族に対しても本趣旨を理解していただくよう切に要望する。

諸官一人ひとりが、『粘り強く』任務完遂に向かって『一路邁進』されん事を期待する。

平成２３年４月１１日

第６師団長　陸将　久納　雄二